英雄の娘

紡ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄の娘

【Ｎコード】
Ｎ４１４９Ｒ

【作者名】
紡ぎ

【あらすじ】
田舎娘なのになぜか追手がかかり、それをかわしながら首都を目指します。
やっと守ってくれる人と合流しました。でもそいつは残念なヤツでした。
なんちゃってファンタジーです。

第一話

両親が行方不明になりました。

私はエナ。１３歳、職業学生。

学生といっても小さな村の小さな学校しかないから、ほとんどは自主勉強である。

午前中は勉強、午後からは牛や馬の世話。ここは砂漠の真ん中だから牧草地帯を探して連れて移動する。その間も本を持ち歩いて読みながら。

行方不明になった親の代わりに面倒を見てくれるのは父の姉さんだ。

褐色の肌、黒い髪の素敵な叔母さん。ひそかに私の憧れだ。

平凡でいい。この平和な村にいたい。

でも、私は世の中を知らねばならない。それはここからの別離を意味する。

父も母もいなくなった。私がここにいなければいけない理由はなくなってしまったのだ。

（だから行方不明になったとは思いたくない。まだお母さんのそばにいたかった）

午後。いつものように牛を追って牧草地へ行く。そこで読みかけの古代遺跡の歴史書を読む。
ふと、空に陰りが見えた。
空を飛ぶ鷹に、エナは見覚えがあった。

鷹が告げた来訪者、彼の名はアリムテル・グイン。
「放浪の識者」と呼ばれる彼は、２０年前のリヒテンシュバルツ帝国、イサハヤ共和国、両国家における英雄「ガーラム・ストリウス」の相棒であり、その智謀は崩れかけた帝国を復旧させるために大いに貢献したと言われている。赤髪、隻眼の

だらけたおっさんだ。

「よ～おっ嬢ちゃん。少しは大きくなったかコラ」

言葉も悪い。昔から。

ちょっと肩から力が抜けたが、約3年ぶりの再会だ。

「お久しぶりですアリム。いいかげん、ひげそったらどうですか。3年前とちっとも変ってませんね。」
「俺のチャームポイントよこれ。それより、ガーラムが行方不明ってホントか？」
「ひと月ほど前、母の後を追っていなくなりました。置手紙がある

んですが、見ますか？」

そう。母がいなくなって3日後、早朝に起きた私は目を疑った。机の上に置手紙があり、そこには娘を置いて妻を探しに行くからごめんね、と書かれていた。

「いや、ほんとにリリエラを追って行ったんだろ。あの夫婦は切っても切れない縁でがっちり結ばれてるからな」

フィっと口笛を吹く。少し早いが帰る時間にする。ここでは込み入った話ができない。

アリムが引いてきた馬の横に、少年がついてきていた。髪は黒。瞳も黒。格好も黒黒黒。おまけに目つきが悪い。というか睨まれている。私は完全に敵視されている。

「こいつ、俺の弟子になりたいってくっついてきたんだ。ブラッド、この子はエナだ。そんな目で見てるとここに置いていくぞ。」

びくっと身体を震わせる。その言葉は彼を怯えさせたようだ。ぎぎぎ、とアリムを見、エナを見、またアリムを見てから、目をそらした。

「ほんとにナニ。」

「押しかけ女房ならぬ押しかけ弟子だ。置いて行っても置いて行っても追いかけてくるから面倒くさくなってな。仕方ないから弟子（仮）だ。」

「弟子にしてくれるまで俺はあんたについてくからな！」

威勢がいい。

牛舎の囲いをあけて牛たちを中に入れてから、自宅の門をくぐる。

中は質素だ。ついこの間まで3人家族で暮らしていたとは思えない。

手早く、お茶を沸かし来客用のカップを出す。その間に叔母さんのところへ行ってくると告げた。

「いつもは叔母さんの家に泊まってるの。夕食はこっちでするからって言ってくる」

「ガーラムの部屋見せてもらっていいか？」

「うん。ついでに泊まっていくんでしょ」

「悪いな」

いつも、3年毎に来ては泊まっていくのだ。今年もそろそろ来るんじゃないかと思っていた。

意外なのは弟子の存在。あんなに怠惰な性格してるのに、人の面倒みられるのかな。

「叔母さん、今日は家の方に泊まるね。アリムが来たの。」

「料理はこっちから持って行くわね。監督する人がいないからって、遅くまで起きてちゃ駄目よ」

やはりアリムは大人の数に入ってないらしい。

分かった、と返事をしてからまた自宅へ戻る。

家に戻るとお茶の準備はそろっていて、アリムはエナを抱きしめた。

「ガーラムなら大丈夫だ。きっと元気でいる」

ぎゅう、と力いっぱい抱きしめられる。この人はそのためにここに来てくれたのだ。

エナもアリムを抱きしめ、うん、と答えた。

第二話

叔母さんの料理を食べながら、アリムのここ3年の旅の話で盛り上がり（ブラッドとの攻防戦とか）お母さんの天然すぎる話とか、話題は尽きることなく夜も更けていく。

「俺がアリムテル・グインと知った時、こいつなんて言ったと思う？俺に一生ついてきます！師匠！！て言ったんだよ。本当に前のめりな奴だよな。」

ぶはははは、と下品な笑い声が響く。

「うるさいな！帝国の英雄なんだから立派な大人なんだと思うじゃないか！！」

「それ、もうアリムが立派な大人じゃないって知ってるってことよね。」

「俺を置いて行くために魔物の森を目指す人だからな……」

「西の禁忌に近づいたの！？そんな理由で。」

一歩間違えれば二人とも死んでしまうんじゃなかろうか。

「それで、エナはこれからどうするんだ？ずっとここに住むのか」

13歳の女の子が、一人でこの村に居ることは難しい。叔母さんもいてくれているが、育ち盛りの従妹を3人かかえているシングルマザーでは、私のことも面倒みきれないだろう。

「まだ分からない。お父さんがお母さんを連れて戻ってくるかもしれないし。」

そんなことはないと分かっていた。でも待ちたい、という気持ちも本当だ。たとえここの生活が苦しくなろうとも、我慢できる。

「師匠と旅に出るのか？」

そーこーでー、懐疑的な視線はやめてもらえるかなっ。

何で敵を見るような目で見られるのかが全然分からないんですけどっ。

「ブラッド、なんか歪んでないか？俺はまだお前を（本当の）弟子にしたつもりはないぞ？」

「ライバルは減った方がいいですから。」

ここで話はお開きとなり、お休みを言って自分の部屋に戻る。

毎日掃除のために帰ってきてはいるが、このベットで眠るのは久しぶりだ。

自分の行く末。

お母さんからは世界の理（ことわり）を学び、お父さんからは戦いの基礎を学んだ。

帰ってこないであろう両親と、未知の世界への旅立ち。

不安を抱えて、エナは眠りについた。

第三話

心臓の音がうるさいくらいに響く。でも声に出してはいけない。
まだ闇夜に目が慣れない。星の光がたよりだけれど、それも難しい。

足が痛い。走って走って、息が切れるくらい走ったけれど、後ろの追手から逃れたなんて安心できない。
ブラッドはどうしただろうか。うまく逃げられただろうか。
アリムは？無事なの？

不安に苛まれる。けれどもう動き出してしまったみたいだ。もう平和なあの村に戻ることはできないんだと思う。

砂漠に足を取られる。歩きにくいことこの上ない。
けれど、日が昇ってしまったらお終いだ。距離を稼がなければ。
頬にかかった汗をぬぐい、上着をぐいっと着直してエナはまた歩き出した。

あの日。アリムがブラッドとやってきたあの日。
眠りについたその後、アリムが私を起こしに来た。
「どうしたの？」
「しっ、落ち着いて、着替えて靴を履くんだ。水と食料をカバンにつめて」

外を警戒しながら、声を潜めて言うその言葉に驚いた。
「なにがあったの？」
「軍の部隊が外にいるみたいだ。まだ襲ってこないけれど、何があるか分からない」

寝起きの働いてない頭にその言葉が入ってくるまでにすこし時間がかかった。

「何で！？」
「いいから、居間にいるからおいで。」
そういうと、部屋から出ていく。こんな田舎の村に軍が来るなんて初めてなんじゃないだろうか。
エナは急いで着替えてカバンに着替えを少し入れる。靴を履いて部屋を出た。
居間にはすでに準備を整えたアリムとブラッドがいる。
水筒とパンを渡され、カバンに詰めた。

「いいか？なにがあったかは分からないが俺はここにいてあいつらの注意をひく。二人は裏から逃げて首都に行け。」
「師匠は！！」
「俺を師匠と思うんなら、エナを守って共和国首都オリゼンのゼルガノ・ハイグルに協力を仰げ。悪いようにはしないと思う」
「俺はあんたの弟子だ。あんたといる！！」
「エナは女の子だろ。お前が守ってやれ。」
「知るか！！」

ええー。

「物々しいけど、急に襲ったりはしないでしょ。曲がりなりにも軍みたいだし。」

アリムとブラッドの漫才の間に言ってみた。
「曲がりなりに軍でも、外のアレは裏の顔だ。顔に黒い仮面つけてるだろ。趣味が悪いとは思うがアレは帝国軍の密偵だ。」
そっと窓から覗く。笑顔の仮面。確かに趣味が悪い。
「帝国？何で帝国。ここって共和国内よね。」

帝国の英雄でも共和国の地元に帰ってきたのだ。
結婚して、地元だからという理由でお父さんはこちらに帰ってきた。

「ああ。だから正規の手段じゃない。共和国との平和協定を破ってこっちにいるんだ。なにか裏があるんだろ」
「ええと。お父さんとお母さんの失踪って、帝国になにか関係がある？」
「ないだろ。あいつらはもっと違う何かにつかまったんだと思う」
やっぱり。
「見つからないように行け。」
とっさに、ブラッドが何か言いかけたがアリムの眼力に何も言えなくなった。
ほんとに、空気読まないなぁこの人。

外に出て、村の内部に移動した。家は村の外れにあるため、軍人がいないほうだとこちらになるのだ。
「私、一人で行くよ。アリムのとこに戻ったら？」
「無理だ。そんなことしたら今度こそ本当に置いてかれる。」
あ、空気読んだ。
「どっちに行けばいい？」
「東の方角、歩きだと４日くらいで隣の町エルウィンがある。」

ぼそっと田舎、と言われる。けれどここは「英雄ガーラム・ストリウス」の故郷なんだけどな。

その時、家の方でガンっと大きな音がした。とっさに家の方向へ踏み出したが、ブラッドに腕をつかまれる。

「行こう。」

そのまま、私たちは東へ向かって駆け出した。

第四話（前書き）

魔物あり。魔法なし。世界は共和国（民主主義）帝国（絶対王権）に分かれてます。
２０年前に共和国と帝国が戦争。英雄ガーラムにより和平が成立。
今はとりあえず平和な世界。

第四話

日が上った。

私はとりあえず岩陰に潜む。砂漠の日差しは容赦なく体力、気力を奪う。

エルウィンまで、いや、砂漠を抜けるにはあと夜中歩かなければたどりつけないだろう。

岩陰には小さなトカゲがはい回る。ここにいてはいけないのは私のほうだ。

あの後、ひっそりと村を抜けたつもりが見つかってしまい、仕方なくブラッドと別れ違う方向に逃げた。

「生きて捕えろ」

連中の言葉からすると殺されないだろうと思う。けれど帝国軍に捕まったら私はいったいどうなるのだろうか。英雄ガーラムを快く思っていない人たちもいたと思う。戦争は正義と悪では割り切れないものだから。つかまって、助けに来てくれる両親はいない。アリムの言うとおり、帝国にはいかない方がいいかもしれない。

分からない。私が私でいられるような場所があるのだろうか。

考えすぎて疲れた。水筒の水も尽きかけ、脱水症状になるか敵に見つかるかの精神的ストレスのためか、そのまま眠ってしまった。

砂漠を抜けると、乾燥した土地から徐々に緑へと景色が変わってくる。苔や草が生え、虫が飛び、そして木々の姿が見え始める。人が歩くための道もできてくる。

以前エルウィンに来たのは1年前、お父さんの愛刀の修理を頼むためだった。修理が終わる2週間滞在し、私はそこで古い書物を読み漁り街の雰囲気を満喫した。

「いらっしゃい、ようこそ鍛冶師の町エルウィンへ」

威勢のいい声にびくっとする。名産である刀、帝国御用達の剣などがあるここは戦士が集う街。

ここから首都オリゼンまでは街道でつながっている。そのため乗合馬車や商人の車に乗せてもらい、順調にいけば2月ほどで首都まで行けるはずだった。

ただ、私には追手がかかっている。理由は分からないが。

平和な道筋ではないかもしれないのに乗合馬車に乗って見知らぬ人を巻き込んでいいのだろうか。それとももう私のことを諦めてくれただろうか。

「知ってるか、武器商人のガルシオン家が武器や鎧を買いあさってるってよ。もしかしてもしかするとまた帝国と戦争でもおっぱじめるかも知れないぜ」

うん。追手がまだいるとみて間違いなさそうだ。政治的利用はま

っぴらです。

お腹がすいたので宿よりもまず食堂を探した。１年前にお世話になった「鳩鳥亭」

「こんにちわー」

「いらっしゃい」

看板娘のマリアさんだ。にこっと挨拶すると、まあぁぁぁぁエナちゃん！！と言ってくれた。

「覚えてくれてたんですね」

「うちが困ってるときに助けてくれたじゃない。あの時はほんとにありがとう」

マリアさんが酔っ払いの巻き添えで足を痛め、それを見ていたエナはこの食堂のお手伝いをかってでていた。さすがに１０時以降のお手伝いはお父さんに止められたが、それまでは繁盛する鳩鳥亭を右へ左へくるくるとよく働いた。

「久しぶりに食事、いいですか」

もちろんよ、と歌うようにメニューを広げた。

「それにしても前より活気づいてないですか？なにかあったんですか？」

「それがね、ガルシオン家って知ってる？共和国の成り上がりの商人なんだけどね、そこから大量注文受けちゃって、それで予約とかあったのにおいつかなくなっちゃって、鍛冶師が足らなくなっちゃってるのよ」

だめじゃん。

「戦士が多い理由は？」

「予約した人たちよ。受け取りに来たのに受け取れないからこの街にどんどん留まっていって、こんなんなっちゃったのよ。」

なんだそれ、と思ったけれど声にはしないでおいた。

「あれ？エナちゃん、お父さんは？」
「この先の宿屋で落ち合います。ごちそうさまでした。」
嘘をつくのは心苦しいけれど仕方ない。
同じ方法で宿屋も確保する。１年前にお世話になっててよかった。

第五話

家出する時にこっそり持ってきた、秘蔵の刀を盗まれた。
俺から逃げるためだけに街道をそれて山道へ入った師匠せいだ。
そこに、山賊があらわれた。

痛恨のミス。というか、師匠がさっさと先に行ってしまうがために起こった悲劇。なぜなんだ。なぜそんなに弟子にするのが嫌なのか。

「識者アリムテル」戦術のエキスパート。彼の頭の中に描いた作戦にミスはない。
２０年前の戦争を回避し、その後も国の安定に務めた彼らはまさに「英雄」。
歌い手と語り手がこぞって彼らの半生を歌や演劇にして、幼い子供たちはもちろん、大人もまじってそれを見て拍手喝采をあげる。
幼い頃、すでに戦争は終わり、英雄譚がいたるところでささやかれていた。
だから、そんな英雄の一人に会えたことで俺は浮かれて、生まれて初めてこの人についていきたいと思ったんだ。

師匠に出会ったのは本当に偶然。うちに刀を買いに来て、その対応をしたのが俺だった。

常々、この家を出たいと思っていた。商人になんてなりたくなかった。
旅の傭兵から剣術の基礎を学び、旅における生活の知恵を教わった。

そこに師匠が現れたんだ。これはついていくしかないと思った。
弟子にはしてくれなかったけれど、師匠に（無理やり）くっついて旅をするのも楽しかった。
普通の旅じゃあ山脈超えてとかないからな。魔物狩りもしたし、禁忌の森はほんとに人間が入ってはいけない森だってのが分かった。

半年くらいの旅を続け、師匠の最終目的地、「英雄の故郷」にエナ・ストリウスという少女はいた。
栗色の髪に茶色の瞳。１３歳だから俺より２つ年下だ。
これといって特徴のない女の子。英雄の肖像画は広まってないけれど、英雄ガーラムも彼女に似て、普通の顔立ちなんだろうか。
彼女を助けるために師匠はあの村に残り、俺とエナは共和国首都オリゼンを目指さなければならない。

はっきり言って面倒だった。せっかく家を出て、アリムテルの弟子になり、自由に国を見て回ろうと思っていたのに。

後ろから、殺気のある刃物が繰り出される。
それを躱し、相手の腹に蹴りを加えてひるんだ隙に脱兎のごとく逃走する。

刀さえあれば相手をしてやるのに！

エナを狙っていたはずなのに俺にも敵が現れる。ということは早くあの子をみつけてやらないとヤバいかもしれない。
「どこに隠れてるんだ。まさかまだ砂漠にいるんじゃないだろうな。」

どこにでもいる、普通の女の子だった。英雄の娘だけど、それが

特別なことじゃないみたいに思ってる。その両親が行方不明になり、落ち込んでいた少女。
師匠のおかげで笑顔が戻ったけれど、その師匠もここにはいない。
人助けなんてガラじゃない。商売にならない働きはするものじゃない、が家の教育方針だった。

「師匠、逃げるなんてずるいですよ。堂々と勝負してください。」
「お前と勝負して、俺が勝ったとしてもついてくるだろ。負けたとしてもお前は絶対ついてくる。だったら勝負じゃなくて撒くのが定石だ。」
さすが師匠。俺の考えなどお見通しですね。
「じゃあこの前の店での飲食代、払ってくださいよ。俺がいたら家計のやりくり、大助かりですよ！」
「なんでお前は主婦感覚なんだ。」
特技だからです。

「エナはな、将来絶対に美人になる。だからその時になってほえ面かくなよ！」
そう言っていたから期待したのに。

うまく撒けただろうか。
この半年間、追いかけていくことはあっても追いかけられたことはない。（ちょっと切ない）

師匠に撒く秘訣とか教えてもらっておけばよかった。（俺だったらくらいついていくけどね？）

周りを警戒し、特に見られている視線がないことを確認してから、お腹がすいたので食堂「鳩鳥亭」のドアを開けた。
「いらっしゃいお客さん。空いてる席へどうぞ」
ちらり、と視線を向けると相席しか開いていないようだ。
「こっち、空いてるよ、来る？」
金髪碧眼、着ているものもそれとなく高級そうな物だ。地元の女の子に言わせれば王子様、と形容したくなる人物がいた。

思わず周りを見、やはり俺に声をかけたのか、とその席に近づく。嫌な予感がする。帝国側の人間か。エナを追っている軍人じゃないだろうな。
「おじゃまします。」
「にぎわってるよねー。おにーさんも予約組？」
「予約？」
「2カ月先の剣の受注、滞納してるんだって。こんなとこに2か月なんていられないよね。でも剣がないと魔物が出たときに困るし。」
「近くに出るのか？」
山脈を抜けてきたから街道沿いのことはさっぱりだった。
「最近多いみたいよ。だから傭兵がこの辺うろうろしてる。君は旅人だよね？」
「そうです。あなたはいつからここに？」
「2週間前から。知り合いにいい鍛冶師がここにいるからって勧められたんだけど、おとなしくいつもの鍛冶師に頼めばよかったよ。」
あいまいに言葉を濁しておく。なんか、なれなれしいな。
「このままじゃ有給休暇もなくなるし、どうしよ。」
「どこかへ奉公してるんですか？」

「そう。帝国騎士団団長なんだよね、オレ。」
騎士団。帝国軍とは別に皇帝陛下を守るためにある、皇帝の命令に従い、皇帝のためだけの私兵。
あまりのことに声が出ない。これは一体どういうことだ。騎士団までこんなところにいるなんて。
「休暇って言ったでしょ。オレは偶然なのよー。でも偶然ここでうちの裏の顔の人たち見ちゃったから、どうしようかと悩んでる所。」
「…何で俺にそんなことを言うんデスカ。」
「追いかけられてるのを見たよ。なにしたの？」
鋭すぎる。ナニこの人ー。
「何もしてない。けど殺さずに連れてこいって言われてるみたいで。」
エナが。
「なーんだろね。きな臭い匂いがする。こっちの専門じゃないんだけどなー。」
がしがしと頭をかきむしる。俺もそうしたい気分です。
「名前教えて。ちょっと調べてくる。」
「無理です。信用できない。」
いきなり襲ってくるような感じではないけれどあやしすぎる。
「だよねー。どうしようかなー。」
その時、店の外で人の喧騒が聞こえた。何かあったみたいだ。
エナが捕まったのかもしれない。
「お金おいてくから。」
「おい待てって、話は終わってないよ。」
なぜかその金髪までついてきた。

第六話

ふんふんふん、と鼻歌を口ずさみながら旅の準備をする。
食料との買い足しはしたし、洋服も洗って干して乾ききった。
エルウィンの町に来て今日で2日目。ブラッドのことは諦めた。きっと私に構わなければ追われることもないだろう。
街道沿いに隠れながら徒歩で行くつもりだ。お父さんからもらった地図もあるし何とかなるだろう。

共和国のゼルガノ・ハイグルという人はお父さんの友人で、１０歳の誕生日にお祝いに駆けつけてくれた人でもある。
いかにも剣豪、といった容姿の人で、あの人の大きな手で撫でられた時は頭がもがれるかと思った。手加減をするのが下手な、瞳の優しいおじ様だった。

あの誕生日の時、お父さんの仲間が共和国、帝国とどちらの国の人なのか分からないくらい人が来て、その時に一人だけ若い青年もいた。あの人は誰だったんだろう。
その人だけはお父さんの近くに近寄らず、お母さんの近くにばかりいた。私には一言、「おめでとう。」としか言わなかったけれど。

「よし、準備完了！出発しよう。」
世界を見なければならない。世界は優しいばかりではないけれど仲間との出会いが自分を成長させてくれるから。

エルウィンの町はあいかわらず混雑していた。

視線を感じて前を見ると、険しい顔の男がこちらを見ていた。ブラッドの目つきが悪いというならば、こちらは極悪非道、といった感じだ。
殺気を感じて嫌な予感がする。
「エナ・ストリウスだな。」
くるりと逃げ出そうと思って振り返ったら、お仲間と思われる二人に行く手を阻まれた。
「宰相閣下がお前に用がある。ついてきてもらおうか。」
宰相。宰相か。頭の中で考えるが、お父さんの仲間で宰相っていう人はいなかったな。

敵決定！

目の前の人が私の左腕をつかむ。その腕をぐるりと捻りながら片足を全体重を乗せて敵の足を踏む。
遠慮はなしだ！
さすがに防護が難しいところなのでひるんだ隙をついて逃げた。

まて！と言われても待たない。
混雑する道をじぐざぐに逃げながら振り返ると距離が縮まってきた。こっちは体格負けするからなぁ。
声を出すか。でも詰所とかに連れて行かれたら説明するのが面倒だ。

「鳩鳥亭」の近くで追いつかれ、また腕を取られた。
「行かないよ帝国なんて。私は共和国側にいる。」
「断ることができると思っているのか。」
自由意志はないのかと思いつつ、今度は蹴り上げて間合いを取っ

た。
3対1。どうしよう。
手下の一人がこちらにつっこんでくる。それを避けたら、積んであった樽に当たり大きな音をたてながらあたりに落ち散らばった。

なんだなんだという表情で歩く人々がこちらを振り返る。人目があった方が有利だ。
「鳩鳥亭」から勢いよく飛び出してくる人達がいた。
ブラッドに似ている。いやいやいや、彼をあてにしないと決めたんだろう。この目は節穴と思いたい。後ろの金髪王子様は誰だろう。
「エナ？無事か？」
「う、うん。こんなとこで会うなんて偶然だね。」
「あいつらは。」
「私を捕まえに来た人。」
当たり前のようにブラッドはエナを後ろに庇う。
あれ？何でこの位置に？
「これはこれはランスロット君じゃないですか。宰相の犬がなんでここにいるのかな？」
ブラッドと出てきた、金髪王子様が言った。

「それはこちらのセリフだな。騎士なら騎士らしく皇帝のご機嫌でもとっていることだ。」
なんだか仲が悪いらしい。
「誘拐計画でも立ててるの？あいかわらず、コソコソするの好きだねぇ。」
「さるお方からの正式な招待だ。貴様こそここでなにをしている。」
「鍛冶師の町で塩買いに来たと思ってるの？頭大丈夫？」
極寒地帯ですよ！というか逃げるなら今のうちじゃないですか！

「今のうちに逃げる？」
「いや、様子を見よう。なぜお前が狙われているかが分かるかもしれない。」

「さるお方って、よっぽど酔狂なんだね。ここで女の子を攫ってこいだなんて、どうかしてる。」
「貴様には目はついてるのか。これがただの子供に見えるとはな。」
「どういう意味？きみって、特別な目持ってたっけ。」
空気が重い。重いってば。

耐えられなくなったエナは逃げることにした。
じりじりと後退し、脱兎のごとく逃げ去る！
「エナ！どこ行くんだ！」
私はただの子供です。

第七話（前書き）

読んでくださってありがとうございます。完結までがんばります。

第七話

町を出入りする時は身分証明書というものを見せなければならない。

生まれたときに戸籍を取り、それに合わせて名前、出身地、生年月日などが書かれているカードが手に入る。どうやって造っているのかは分からないがこのカード、本人以外には触れられないようになっているのだ。

噂では、共和国と帝国が共同開発したものらしい。

科学的には仲いいんじゃんと思うのだけれどそこはそれ。これを開発→成功した当初、どちらの国がより貢献したかで揉めに揉めて以来、もう二度と両国が協力することはないだろうといわれている。

なんのこっちゃ。

エルウィンの町に入る時は砂漠側から来たためか、並ぶことはなかった。しかし街道行きの関所は人がごっちゃになって混んでいた。

「ちょっとどいてください。通ります。」

人込みをかき分け、関所の人に証明書を提示すると目的地はオリゼン、のはんこを打たれる。（触れないけどはんこは押せる。これも不思議だ。）

振り返るとブラッド、ランスロッド、金髪王子様の順に四苦八苦しているのが見える。みんな図体大きいから。ここでは小さい身体

で助かった。
いち早く町を抜けだし、今のうちに距離を稼ごうと必死に走った。
なぜブラッドも追いかけてくるのかが分からなかった。

道行く商人や旅人達の姿もまばらになり、他に誰の姿も見えなくなった頃、ようやくひとごこちをついた。
「お前、足速いな。」
ついてこれたのはブラッドだけ。宰相の犬（他称）さんと金髪王子様（見た目で判断）さんも姿が見えなくなっていた。
「そうかな。」
「その恰好、どうしたんだ。髪切ったのか。」
エナはその場でくるりと回った。
長かった髪は男の子のように短くなり、動きやすい服にショートパンツになっていた。
「女の子の一人旅はいろいろとまずいかなと思って変装してみました。」
ブラッドは頭を抱えた。
「その発想は男前だが一人旅にするつもりはないぞ。」
「だって、悪いかなと思って。」
ブラッドの初対面の時のあの態度の悪さは忘れていない。
「悪かったよ。オリゼンまで一緒に行くから。」
「いいの？」
「お前が人知れず帝国に連れ去られてた、ってことを師匠がこの後知ったら俺、いろいろと…」
その後はブラッドの顔色が悪くなり、ガクガクブルブル震えだした。
なにがあるんだ。

「このまま街道へ行くつもりか？」
「うん。隠れて行けば時間がかかっても安全でしょ。」
「山を越えよう。」
そんなハイキングみたいな文句を言われても。
「無理。こっちから行ったら禁忌の森の近くを通るじゃない。あそこには言っちゃ駄目だってお母さんが言ってたもの。というか、超えて来たんでしょ。また通るってどういうことよ。」
懲りないのか。
「いや、もう少し先の所にな、山賊が出るんだ。」
「うん？」
「俺あいつらから刀取り返さないと得物がない。」

「バカ！！ほんとバカ！！何で追われてるのにやっかいな所に行こうとしてるのよ！！」
「ひど！会って何日も経ってないのにバカ呼ばわりひど！！」

第七話（後書き）

金髪王子様の名前がないのは、ランスロッドが名前を言いたくなかったからだと思う。

第八話

荷物はブラッドが持つ。当然だ。
固い岩山を手を使い、足をかけてロッククライミングの要領で登っていく。当然、命綱はない。真っ逆さまに落ちたら命はない。
次はここに手を置く、とばかりに指をさす。私はそれに頷いた。
なぜこの険しい山を登らなくてはならなくなったのか、それを考えると憂鬱になる。
おかしいな。私が巻き込んだはずなのに、気が付いたら私が巻き込まれてる気がする。
考え事をしていたら、気をつけろ、とばかりにコツンと隣から小石が飛んできた。
もうイヤだ。

近道だから、安全第一がいい、という押し問答の末、山賊が出る山道を行くことになった。
幸いというかなんというかサバイバルに慣れている男がいるので問題はない。
心配なのは普通は避けて通るはずの山賊に、こちらから会いに行くということである。
「うちにあった宝刀のうち一番厳重に、一番見えにくい場所にあった業物で、呪いがかけられてるからうちの一族以外に絶対に渡して

はダメな一級品なんだ。」
「じゃあ何でそんなやっかいなものを持ち出したのよ。」
「全部振ってみて、一番手になじんでしっくりする刀がそれだったからだけど。」
「呪いって、どういうものなの？」
「さぁ？そんなにたいしたことなかったよ。声が聞こえたり、透けて見えるのが居たくらいで。」
「透け…幽霊？」
「普段もその辺にいるからそんなに怖いものじゃないと思うんだけどなぁ。」
見える人らしい。
「悪いものじゃあないんだね？」
「…。」
不安が残る。

ロッククライミングが終わり、息をついた。
山脈のちょうどてっぺんまで登ってきた。途中から木が生えない岩山ばかりになったときはさすがに張りついたまま夜を超すのかしらと思ったが、そんなことはなくてほっとした。

このまま西の禁忌の横を通り抜けて、海の方面に抜けてから首都を目指す。

集めておいた薪に火をつけ、お湯を沸かす。簡易テントも張ったし、今日は野宿だ。
見晴らしのよいこの場所で見張りはなくていいということなので夕飯を食べたあとはテントの中に入りすぐに眠りについた。

夜明けと共に目覚めた。外で一夜を明かしたブラッドは眠っている。
朝日が照らす中、変なものを見た。
女の人がブラッドに添い寝をしていた。
「おはよう。いい朝ね。」
しかも口をきいた。
妖艶な美女、という言葉がしっくりくるナイスバデー（棒読み）
なお姉さまだ。
「オハヨウゴザイマス。」
「近くに来てくれたから本体置いて来ちゃった。あまり時間がないみたいだから早く迎えに来なさい、ってこの子に言っておいてくれない？」
「時間がないってどういうことですか？」
「西の禁忌の近くでしょう。ここにいると、抑えてた魔物が次々と生まれてくるみたいなのよ。私は封印の役割もあったから正当な後継者のこの子が持っていてくれないと、暴れちゃうのよねぇ。」
困ったわ、と困ってなさそうな顔で言う。
「…いつの時代の人ですか。」
「刀が造られて千年になるわねぇ。」
千年、という単語に思わず聞いてしまった。
「リリエラ・ハーズワースという人を知っていますか。」
「懐かしい人を知っているのね。でもあの子、行方不明になってなかったかしら。」
「この時代に来て、私の母親になりました。」
「普通の人間じゃなかったのねぇ。ジャンパーなんて、数奇な人生ね。」
やっぱり、あの人はこのまま帰ってこられないかもしれない。

ブラッドが目を覚まし、女の人は朝焼けの中に消えてしまった。
「早く刀を回収しないと、大変なことになるみたいよ。」
「夢でお前らの会話を聞いた。魔物が増えるのはまずいよな。」
テントをたたみ、出発の準備を整えて西へ進む。
しばらくすると森になった。うっそうと生えた木々の間を通り抜け、たまに罠にかかった兎などを見つける。すでに山賊たちの縄張りに入ったみたいだ。魔物に出合っても、逃げるしかないので静かに移動、は無理だった。

パオーンと鳴きながら邪魔な木を押し倒しながら追いかけてくる。外見、マンモス。長い牙が高値で売れる狩れるなら狩りたいレアモンスターだ。
長い鼻がエナの足をからめ捕ろうと動いたが、それに気づいたブラッドが鼻を蹴り飛ばす。
そのうちに追いかけてくるマンモス、まちぶせマンモス、子供のマンモスなど、その数を増やしていく。
魔物が増えてるというのはあながち間違ってないようだ。
しばらく走ると前方に頑丈そうな巨石が立ち並んでいた。
「あの岩に登れるか？」
通れそうな足場を確認すると、減速せずに一気に駆け上がる。
勢いを殺しきれなくてふわりと宙に浮きそうになった所をブラッドに腕を掴まれた。
「ほんとに足速いなお前。」
「ブラッドは目がいいよね。」
お互い何かの干渉を受けているみたいだ。

「拒否権はないけどな。さて、囲まれたけど、どうする？」
周りはモンスター。武器はない。けれど不思議と危機感はなかった。

第九話

パォォンパォォンとそこかしこで暴れまわってるマンモス達。なんだか踊っているように見えなくもない。
いや、現実逃避している場合ではないけれど。

そのうちに、がつんがつんと体当たりをかましてくる。こちらは石の上なので心配ないが。
必死さが恐ろしい。頭から血を流すのもいる。
「集団恐慌、ってやつかな、この暴れ方は異常だ。」
「西の禁忌の影響かな。魔物を活性化させる物って一体なんだろう。」
「そういうことを考えるのが国家だろ。個人での解決は無理だ。」
「引き金が彼女だったら…どうする？」
ブラッドの家の封印された刀。その守護者たる彼女。
はやく迎えに来て、と言っていた。幽霊かもしれないがエナにも見えたということはそれ相当の力を持つ存在だといえる。

「それはそうと、千年前から来たって？」
油断した。会話を聞かれていたならそれも聞いていたに違いない。
「お母さんが、ね。」
「英雄も？」
「まさか。お父さんはあの村の出身よ。時代を超えるなんて、そうそうないと思うけど。」
この世界からいなくなって、帰ったのか、また違う時代に行ってしまったのかは分からないが。
「時代を超えるなんて、信じてくれる？」

「さぁ？あの女が嘘をつくとは思えないし。本当のことなんだろ。」
「あの人、名前なんて言うの？」
「姿は見えるけど、夢の中以外は声が聞こえないんだ。よっぽどのことがないと波長が合わないみたいで。」
「名前を聞くのも忘れるくらいよっぽどのことがあったのね…。」
聞かない方がいい。

「あいつが見えるのは俺だけだったから名前なんてどうでもよかったんだよ。」

きらり、と木の茂みから光るものが見えた気がした。気のせいだったかと思ってブラッドを見ると、
ニヤリ、と形容したくなる笑顔が見えた。
「聞きたくないけどどうしたの。」
「ようやく会いたい相手が来たみたいだ。」
つまりは山賊ってことね。
エナの荷物を渡してきた。自分で持て、と。
「話を聞いてくれなかったら、」
「実力行使になるよ。エナはなるべく離れてて。」
怪我したくないからそうします。

登場人物

主人公　エナ・ストリウス（１３）
見た目普通。オーラ普通。女性は髪が長いこの世界において、ばっさりショートカットにしてしまった思い切りのよい少女。１３歳だからショートパンツ、という生足設定。
母親から「世界を見なさい」と教えられ、遠からず旅に出なければいけないことは分かっていたので覚悟はできていた。たまに後ろ向き性格なお嬢さん。
いまのところ、逃げ足は速いというチート機能は持っている。

ブラッド（１５）
「識者アリムテル」の下僕、いや、弟子候補。思い込んだら一直線。いいとこのお坊ちゃんだったが、家業を継ぐのが嫌で家出。商人の息子なので家計に厳しい。
エナを守らなければと思うのだが、年下の女の子をどう扱っていいのかわからないという一面もある。
妖刀の正式な継承者なのでそこのとこも悩み中な少年。

「英雄」ガーラム・ストリウス
エナのお父様。帝国と共和国を平和に導いた立役者。酒を酌み交わすと友達になるという特技で敵を一掃。帝国、共和国ともに知り合いがいっぱいいる。のほほん系なイケメン。

リリエラ・ハーズワース
千年前からトリップしてきたトリップ体質なお母様。１０歳でガーラムと出逢い、５、６回異世界を旅してからまたここへ戻ってきた。結婚後、２０年くらい呼び声を無視し続けてきたが、強制的に違う世界へまたトリップしてしまった模様。もう帰ってこれないかもしれない。（笑）

「識者」アリムテル・グイン
鷹のシアードレーズといつも一緒（という設定）赤髪隻眼のおじ様。
偉いひとなのに偉ぶった所がない少年のようなおっさん。戦術のエキスパートと言われているが戦術は出てきません。作者が頭悪いので。

ランスロッド（２０）
宰相の犬、と言われてしまった帝国軍第８部隊（非公式部隊所属）隊長。高貴な人からエナを攫ってこいとの密命を受けている模様。人が殺せるくらいの眼光をもつ。隊長クラスなので剣を持たせても強い人。特別な目をもっている（ブラッドとかぶった…）

アリソン・フォン・ローデンベルク（２０）
ランスロッドが名前を呼んでくれないので「金髪王子様」王子様と呼ばれるにふさわしくキラキラしたオーラを持つ帝国白騎士団の団長でもある。

隠密行動に向かない。が、ランスロッドの密命に興味が湧いてついていくことに。

ちなみにランスロッドとは帝国貴族学校（アカデミア）で同級生だったりする。

ガルシオン家

２０年前の戦争で武器商人として出世した商人。ブラッドの生家。

第十話

弓をつがえ、一斉に矢が放たれる。
狙いはマンモス。当然か。牙はお金になる。
馬に乗った男たちが一斉に飛び出してきて槍と剣をもってマンモスと対峙する。統制が取れた動きに無駄はなかった。よっぽど優れた軍師がいるのかもしれない。
これは手こずるんじゃないかなと思いながらブラッドの方を見て、姿がないことにびっくりした。

マンモスの足元にいるのを見つけ、ヒヤヒヤする。踏みつぶされたりしないんだろうか。

そのうちに、山賊の馬を奪い取り、その背にまたがった。

馬を走らせて何かを探しているみたいだ。

山賊の方がマンモスの動きを止める方が早かった。そのまま囲んで徐々に範囲を狭める作戦のようだ。
私はいったいどうしたらいいのですか。
「こんなところで旅人とは珍しい。一人か？そんなわけないよな。」
「ええと。はぐれてしまったんです。そしたらマンモスに襲われて。」
「逃げて来たのか。そのほうがいい。下手に戦って刺激するよりもよかったかもしれないな。」
うんうん、と頷いて納得したようだ。
「ところで我々は山賊なんだが、金目のものは持っているか？」
それ、聞かれると思ってました。

縄で縛られたりはしなかった。比較的友好的に、「我々と一緒に来るんだ」といわれて　はーいと返事をした。
「シュカ、このおちびさんをどうします？」
「ここにおいて行けば別の魔物に襲われるだろう。一度砦に戻ってから考えよう。」
そのシュカさんの馬の後ろに乗せられ、山賊の砦に向かうことになった。
山賊の手下？たちはマンモスの牙を取る作業があるので、シュカさんともう一人だけ連れて山の中を行くことになった。
ブラッド、どうするんだろう…。

「名前を聞いてもいいだろうか。」
「はい。ソラといいます。冒険者になってまだ1週間しかたってません…。」
1週間でいろいろありました。
「まさかあのガラナ山脈を通ったのか？その細っこい腕でロッククライミングとは恐れ入るな。」
「体重軽いですからね。自分の体を支えるなら大人も子供も関係ないでしょ。」
「一理あるが、それにしてもこの界隈には山賊が出るとは聞いてなかったのか？お前の保護者はどういうやつなんだ。」
わぁ。シュカさん常識人な気がする。手本となるいい大人だ。
「山賊さんに常識を言われても。…まさかこのまま砦についたら強制労働とかないですよね。」
「保護者をこちらで確保できたら、説教して街道に戻してやるよ。山賊と言っても魔物狩りで人間を襲うような奴はいない。」
ちょっと安心した。なにかあってもシュカさんに頼めば大丈夫そ

うだ。
半日ほど馬で移動してあたりが薄暗くなる頃、砦についた。
砦はシュカさんとその手下の山賊さんみたいに和気藹々とした雰囲気じゃなくて
ギスギスしていた。
「頭領はまだ治ってないのか。」
「はい。色々薬を試したんですが、まだ見えてるみたいで。このままじゃ精神崩壊しそうです。」
あの呪いの、声が聞こえたり透けて見えるやつかなぁ。
「…その前にこの子に食事を与えよう。腹はすいているか？」
やたっ！朝食から何も食べてないんだ。
目を輝かせてシュカについて行った。

そこは山賊の居住区らしく、女の人や子供がいた。
松明(たいまつ)で照らされたそこは食堂のようで帰ってきた男たちに女が食事をふるまっているようだ。子供はそのお手伝いをしたり小さい子は遊んだりして賑やかしい。
「で、連れはどういう人だ？」
「黒目黒髪短髪目つきが悪いってとこですかね。私の知り合いから私を頼まれているはずなのに置いて行くなんてひどいですよ。」
「あの石の上で一緒にいたのは見間違いか？」
「見えてたんなら知ってるでしょ。私は置いて行かれたんです。」
暖かいスープは絶品だ。いろいろな調味料でコトコト煮込んで肉も入ってるーーーー。
「本当に置いて行かれたのか？」

「そのうちに追いついてくると思います。」
「それはここに来るということで間違いはないな？」
するどいな。この会話でこの流れに持っていくとは。

「あの男に見覚えがある。２週間前にここを通った男と一緒にいた奴だな。」
肯定はしない。知らない事だから。
「あなたが頭領ではないんですか。」
「副頭領、だな。ここの頭領に拾ってもらったんで、恩義がある。頭領に顔向けできないことは出来ない。」
この人をこちら側に引き込むことはできなさそうだ。
とりあえずお腹を満たし、どうしようか考える。
「牢屋にでもぶちこみますか？」
「さすがに年端もいかない子供を牢に入れたくないな。ジェンド、来てくれ。」
給仕をしていた子供を呼び出す。ジェンドと呼ばれた少年は、エナと同年代に見えた。
「仕事を与えてやる。この子の監視だ。寝る時もひっついてろ。」
仕事と聞いてぱっと目を輝かせた子供は、監視の言葉に落胆した。
寝るときは嫌なんだけどな。

「なにお前器用じゃん。これも直せる？」
ジェンドに連れられてきたここは、男の子達の４人部屋だった。
聞けば１０歳になると親元を離れ、戦士になるための訓練を受けるそうだ。同年代との一緒の共同生活。楽しそうだなぁ。
ジェンドは繕い物が苦手らしくて穴が開いた服をそのままにしていた。見かねたので針と糸を取り出して縫ってやったら簡単に心を

開いた。
「女みたい。」
「…嬉しくないな。一応男だし。」
そのうちに他の3人が賑やかに帰ってきた。
「なんだよ。新入りか？」
「シュカさんに仕事もらったんだ。いいだろう。」
「どんな仕事だよ。」
「監視、だ。お前らも見張れよ。」
わぁ。4人にみつめられるといたたまれない。

「シュカさんて、すごくいい人だよね。時期頭領とかなのかな？」
頭領は精神崩壊しそうなら代変わりしそうだ。
「まさか。頭領はここの生まれじゃないとなれないよ。シュカさんは10年前に共和国の軍から追放されたって聞いたよ。」
「元、軍人なんだ。」
だから頭がいいんだな。
「訓練は厳しいけど、それ以外は優しいよ。あの人が頭領になってくれたらここも安泰なのに。」
「安泰って言葉よく知ってたな。」
「バカにすんなよ！俺は将来、シュカさんみたいな大人になるんだからな！」
「ジェンドが？無理無理。この前試験で追試くらってたのお前だけだぞ。」
「うるさいな！たまたまだよ。」
ジェンド、いじられキャラだったのか。
もう寝なさい、という世話役のおねぇさんの声でお開きとなった。

でも眠れるわけがない。この夜に乗じてブラッドは来ると思うか

ら。

深夜。ジェンドがくぅくぅと寝息をたてているのを確認して、ベットからはい出した。

どれくらいの騒動になるか分からないが、外にいた方がいいと思う。混乱したら置いて行かれるかもー。

山賊の仲間になるとかイヤですからー。

「ううん。」

ジェンドが寝返りを打った。びくぅ！となるが、また眠ったようだ。

心臓に悪い。早くここを出よう。

「どこ行くの？」

違う方から声がした。ここは４人部屋なんだった。

「ト、トイレ。」

「ついていくよ。ジェンド、起きろ。」

うにゃぁ、と可愛い声を出した。

第十一話

私は男の子ではない。だからついてこられると非常に困るのだ。
それでもトイレ、といった手前、行く振りをしなくてはいけないわけで。
立ってする、とかできないわけで。
「なにしてんの？さっさとしてきなよ。」
ふわぁ、と眠そうなあくびをする。半分夢の中に居そうだ。
夜とはいえ、5人の集団行動は目立つのだ。
「眠れないから散歩してきていいかな？」
ジェンドだけはええ！と不満を露わにしたが、他の3人は不信感を抱いたようだ。
「ここはお前のいた街じゃない。ルールがあるんだ。ルールに従えないなら、」
「分かったよごめんなさい。言ってみたかっただけです。」
はぁ。失敗したみたいだ。ジェンドだけだったなら逃げれただろうにな。
ジェンドは立ったまま船をこぎだした。
「ごめんねジェンド。布団で寝ようか。」
「うんー。そうしようー。遊ぶのはまた明日ねー。」
ちょ、萌えるんですけど。

その時、ピィ、と指笛が聞こえた。ジェンドがはっと目を覚ましてがしっと私の腕を掴んだ。
「痛い！」
「これは侵入者の合図だ。こっちにこい！」
そうなの？という前に両方の手を取られる。引きずられるようにして廊下を走った。

「敵は何人ですか。」
「分からん。シュカが侵入者があるかもしれんというので警戒していたが、影はひとつだった。まだいるかもしれん。」
いえ、一人だけだと思いますが。
「ジェンドは引き続きこの子を見張れ。そのほかは戦闘準備だ。」
同年代なのに一人前の働きをしていると思う。ジェンドでさえ顔つきが変わった。
なんだか、いたたまれないなぁ。
ふと、外をみるとひらひらと手を振る人が見えた。
あれは間違いなく、

金髪王子様だった。

ここで帝国の追手かー。こっちの道来て失敗だったじゃんー。
がっくり肩が落ちた。

連れてこられたここは作戦本部みたいで、次々に報告が入る。
「てれほん」と呼ばれるそれは高価な物だった気がするが、気のせいですかそうですか。
「何人仲間がいるんだ。教えろ。」
ジェンドの態度が変わった。それは少し悲しかった。
「知らないよそんなの。私と一緒に来た人は一人だったけれど。」
「どういうことだよ。火薬まで使ってるんだぞ。」
どこかで爆発する音が聞こえる。帝国の軍人さんだろうか。ブラッドは武器を持っていないから素手だと思う。
「火薬なんてそんなの一般人が持ってるわけないじゃん。ジェンド

も質問ばかりじゃなくて考えなよ。」
「お前が連れて来たんだろう。」
「私になにか力があるとでも思ってるの！？私はただの子供だよ！」
ぶん、と手が上がる。殴られる！と思ってとっさに目をつぶった。
「やめなさいジェンド。ソラも知らないことだって言ってるじゃないか。」
シュカが止めてくれた。ほんとに、頼もしい人だなぁ。
「信じるんですか。あやしいのに。」
「疑わしきは罰せず、だよ。我々は共和国民なんだから。帝国みたいに野蛮なことはしない。」
納得がいかないジェンドに、よくやったからみんなといなさい、と声をかける。
ジェンドは下を向いて、はい、と返事をして出て行った。
「闇に隠れてて人数も把握できないよ。隠れるのが上手だね。」
「本当に私はなにも知りません。」
「それはそうだろうけど、君の保護者はどこかな？いっそきみを渡したら帰ってくれるんじゃないかと思うんだけど。」
帝国に渡されるのは絶対イヤだ。
「渡さないでください。」
「あれ？じゃあお迎えじゃないの？」
「違います。」
どうしよう。どうしたらいいのか分からなかった。

第十二話

遠くから、エナが連れて行かれるのを見ていた。
そうだよねー。目立つところにいたもんねー。
男たちは作業をしているためブラッドに気づかない。このまま、エナを囮にして山賊の仲間の所へ案内してもらおうと決めた。
い、行き当たりばったりじゃないんだからねっ！

山賊の砦までは夜になる前についた。そこに、ふわっと白い影が見える。
間違いなく、自分が持つべき刀の守護霊だ。
嬉しそうにふわふわしてるが、あいにく言葉は通じない。
「どこにいる？」
こっちだ、というように案内をしてくれた。

「頭領、大丈夫ですか、薬を持ってきました。」
砦から少し離れたところに小屋があった。どうやらそこに刀はあるみたいだ。
様子をうかがう。中にいるのは二人だけみたいで会話が聞こえる。
「駄目だ。近づくと危険だ。」
「解呪は出来そうですか。」
解呪、という言葉にはっとした。呪いを解くことができるのは限られた一族だけ。刀を造り、呪いを授け、その力が振るえる者は。
間違いなくブラッドと同じ一族ということになる。

「知り合いはまずい。家出がバレる。じいちゃんに殺される！！」
あああ。面倒だなぁ。逃げ出したい。いや、逃げても解呪されてもどちらも見つかった時に地獄を見る。

「…解呪は無理かもしれない。」
「エリオス様にも解呪できないとなると、これの持ち主は無事だったんでしょうか。」
「そいつが持っていたからここまで平気だったんだろう。世界の均衡を脅かすほどの力を持った刀なんぞ、聞いたことがない。」
そんなに力のある刀だったのか。物置の一番奥で埃をかぶっていたんですが。
ううう、と迷っている間にその目が知り合いを察知した。

目に見えるのは黒い衣装のランスロッド。それと金髪王子。
まだ遠くにいるため、あちらはこっちに気づいてないだろうが砦にはエナがいる。
「ああああめんどい。どっちを先。むしろエナが先かな…。」
ちょっと待っていてと思いながら行動を開始した。

第十三話

ブラッドと金髪王子はどうやら分かれて行動するようだ。
気になるのは、他に１０人以上の手勢がいることだ。しかも、ランスロッドがそのほとんどを攻撃していていて相手が帝国軍ではなさそうな所だ。

まさか違う方面からも追手が増えたんじゃないだろうな…。

金髪王子のほうは悠々と歩いている。騎士だって言ってたから隠れるのは得意ではないかもしれない。そもそも恰好が目立つ。

ブラッドの目は元々特別製だったが、刀の後継者になった時からまた格段に目が見えるようになっていた。夜目も利くし知っている顔だと余計に判別しやすい。

ちなみに服は透けません。

砦の廊下を走っていると、四人の男児に出会った。そっと気配を隠して近づく。
「こんなに侵入者がいるなんて、何者なんだろうな。」
「シュカさんはあの子を助けに来たんじゃないかって言ってたけど。」
「ジェンドも気にするなよ。任務なんてまだ早かったんだよ。」
任務、という言葉にここの山賊はあんな子供にまで危険なことをさせてるんじゃないかと心配になった。
「ただの子供だと思ってたのに、あんなに敵を引き連れてくるなんて…。」

ほの暗い感情がジェンドと呼ばれた少年の瞳に宿った気がした。
それにほかの子たちは気づいてないみたいだ。

「おい。」
気づいたら、ランスロッドが目の前にいた。こちらも気配を隠してたのに、だ。
「エナはこっちじゃないぞ。」
「わかってる。あっちにはあいつを行かせた。」
あいつってのは金髪王子か。名前言わないなぁ。
「誰がこの山賊の砦を襲ってるんだ。」
「共和国軍みたいだったから、とりあえず沈めておいた。」
聞いてみただけなのに答えが返ってきた。なんて口が軽いんだ。
というか帝国軍だけじゃなくて共和国軍だって？なにやらかしたエナ…。
ブラッドの気が遠くなっていると、何かをこちらに向けて放り投げてきた。
エナの荷物だった。
「何で持ってるの。」
「たまたま見つけたから。エナは本当に共和国を選んだのか？」
「おおげさだな。帝国側の真意が分からなければ何があるか分からない場所に行きたくないというのは分かるだろう。」
「ただ招待しているだけだ。傷つけるつもりはない。なのに何故いうことを聞かない。」
「その上から目線が怪しいってことじゃないか。宰相閣下殿はエナをどうするつもりだ。」
「どうするも、ただ話をしたいだけだ。あとは父親の話を聞けたらと。」
やはり英雄がらみなのか。

襲ってきた敵をかがんで避けて次の敵の顔の真ん中に右拳を打つ。
さらに向かってきた敵はあえて避けずに突いてきた剣を躱して転ばせて上から踏みつけた。
二人を気絶させてランスロッドを見たらこちらは三人を気絶させていた。
「強そうに見えないけど強いよね。エルウィンで部下二人ついてなかったっけ？」
「一人は宰相閣下に報告のために帰した。もう一人はエルウィンで剣を待ってる。」
それは金髪王子の剣デスカ。

ブラッドは気絶した共和国軍の服を探って「火薬」を見つける。最近軍で実用化された新しい武器でもある。
「火薬」から「爆弾」へと進化するのはそう遠くないように思えた。
ブラッドは火薬の威力を知っていた。これが戦争にでも使われたら被害は甚大だ。これを開発したのがアルシオン家だと、父親だということを知っている。今は公表されていないが、人々の憎悪がアルシオン家に向けられるのは時間の問題だ。
けれど今はそれを考えないようにした。

どうしたものかと考えてたら、明かりを持った人が近づいてくるのに気づいた。
急いでいるみたいなのでとりあえず様子を見る。なぜかランスロッドもついてきた。
「敵なのか味方なのか分からんな。」
「俺のことはあとで話す。あの人物に見覚えはないか。」

明かりで照らされた人はシュカだった。
話したことはない。刀を失くした時に近くにいた人物。アリムがあいつはおもしろい、と言っていた。どこがおもしろいのかは話してくれなかったが。
シュカは焦っているのか、こちらの気配には気づいていないようだ。
「エナがどこにいるか見えないか？」
「うーーーーん。あ。」
見えた。でも何で？
「あんたの仲間の金髪といるんだけど。」
「手を出すなと言ったのにあいつは！」
金髪王子様もマイペースなようです。

第十三話（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
忙しくなってきたので不定期掲載になります。

第十四話

一本の「てれほん」の報告が事態を悪化させた。見張りからの緊急回線で「共和国の旗が見える。大軍を率いてこちらに進軍している」

とのこと。

「共和国の軍隊？どういうことだ。」

「まさか警告もなしに攻撃したりはしないだろうが。気になるな。」

ちらり、とエナを見たが、エナはふるふると頭を横に振った。

何も知らないとアピールしたようだ。

「頭領を呼ぶか。こんなことになってるんだ。あの刀のことは一時中断してもらおう。」

俺が行く、とスキンヘッドの人が部屋を出て行った。

「あなたが１０年前、共和国の軍人だったことを聞きました。」

シュカが振り返る。にやっと笑った。

びくぅっと心の中では震えたが、表情に出さないことに、成功した…？

「情報の取引か。」

「だって、私に心当たりがないですからあとは他の人のことだと思うでしょう？」

「普通の１３歳はあんまりそういうこと考えないと思うんだがなぁ。ジェンドみたいに。」

ジェンドはジェンドでかわいいけれど。

「…軍を抜ける時に、とある人の情報を預かってくれと頼まれた。相手に気づかれたか、その人が捕まったか。」

独白のような言葉にエナは詰まった。

「誰のことを言っているのですか。」

「間の悪い時に来たから君に疑いの目が行くのは申し訳ないと思ってるよ。でもこの件は君に言っても仕方ない。」
ジェンドのあの冷たい言葉にこの人は申し訳ないと思ってくれているのだ。
「ゼルガノ・ハイグルという人ではないといいのですが。」
シュカはエナを見た。その表情で分かってしまった。

「捕まったのですか、ゼル様は。」
「捕まっていないが、罪状は反逆罪、だ。隊長を知っている人が聞いたら腹抱えて笑えるくらいなんだが。」
あああああ。会いに行く途中なのにその人は罪人（仮）！

「私を自由にしてください。そしたら、私の旅の連れもここに連れてきますから。」
ブラッドがいたからといって事態は好転しないだろうが、あの刀をブラッドが持てばこのギスギスした雰囲気もマシになるだろうと思った。
「外は危険だ。共和国軍もいるし、間違ってうちの人間が君を傷つけないとも限らないよ。」
けれどずっとここにいて、何もしないでいるよりも。
「私は行きます。」
シュカの反論を許さずに、エナは扉を開けた。
これでよかったのかはわからなかった。

音もなく、隣に並走する。
「王子様…。」
にこっと笑った顔はかなり魅力的だったが、この人は帝国軍の人。外は共和国軍、ブラッドはいない。

なんだかいいことが一個もないような気がする。
「王子様は嬉しいんだけど、オレの名前はアリソンて言うんだ。アリーって呼んでね。」
「私はエナです。連れはブラッド。私を捕まえに来たのですか？」
「んー、興味、かな。」
ぴたっと止まった。それに合わせて金髪王子、もといアリーがエナの手を引く。
「ランスロッドが君に興味を持った。気になるでしょ親友なら♪」
「親友、ですか。」
氷のような言葉の応酬をしていたような気がしますが。
「皇帝フランジェルと宰相は今は敵対してるんだよ。宰相が何をしようとしているか、皇帝の忠臣としては気になるんだよね。」
「アリー。」
エナは手を振り払い、名を呼んだ。
「男の子に女の子の名をつける習慣のある家は帝国側に1つ。貴族であるローデンベルク家。たしか皇帝に連なる家系だと思いましたが。」
「賢いね。それを知っているのは貴族の中でも一部だよ。君ってほんとに何者？」
「ガーラム・ストリウスの娘です。」
「それ以外にもあるんじゃないの？」
怪しく金色の瞳が輝く。これは地雷を踏んでしまったようだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4149r/

英雄の娘

2011年3月26日19時10分発行